# 人間教育が美しい景観をつくる

鹿児島県景観アドバイザー
（株）東条設計　代表取締役会長
東條（とうじょう）　正博（まさひろ）さん
Masahiro Tojo

「社訓にある『建築主の側をしっかり向いた仕事をしていこう』とは、信義を重んじる、武士道の教えです」と語る東條さん。一般住宅をはじめ、商業施設やそのほかさまざまな分野の設計を手掛けており、代表的なもののひとつには、鹿児島港の観光スポットにもなっているドルフィンポートがある。

また、建築の視点から講演会や鹿児島県景観アドバイザーの活動を通して、景観形成の助言・指導を行っている。

「景観づくりには、地域の方々の意識が一つになり、それをリードしていく人材が必要です」と地域の中から景観に対する意識が芽生えることを期待している。

そんな東條さんに建築の魅力や景観への思いなどを語っていただいた。

## 建築の魅力は

建築はクリエイティブな仕事で、建築主の財産でありながら、私たちの作品でもあります。

ただ、建築の魅力もほかの仕事と同じで、お客さんに喜んでもらえる、これが一番です。また、白いキャンバスに自由な絵が描けるという魅力もあります。自由といっても当然制約はあります。法令、予算、建築主の主観など。それをまとめて、いい建物ができたときの感動はひとしおです。苦労もありますが、それが大きければ大きいほど感動も大きいですね。

年間50棟前後設計していますが、私にとっては一つ一つの建物が子どもみたいにかわいいので、建物の形などは全部覚えていますよ。

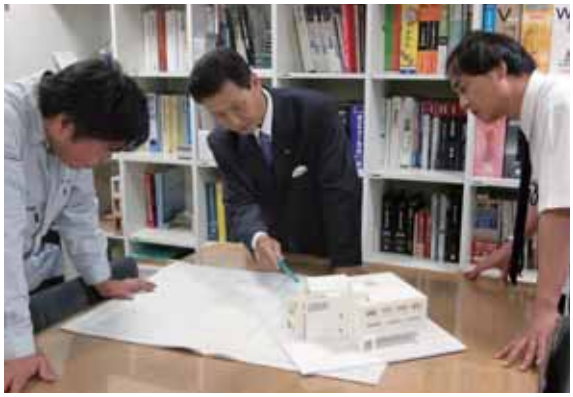
ライトアップされたドルフィンポート。桜島や錦江湾の景観に配慮した2階建ての構造になっており、景色を見ながらのショッピングや食事が楽しめる。

## 設計でこだわっていることは

私の判断基準は得か損かではなく、善か悪か、つまり利己的ではなく利他的ですね。ややもすれば、建築雑誌などに掲載されている建物は、際だった面白いデザインだったりするのですが、私はどちらかというと地に足が着いた建物を作っていきたいと思っています。機能性を支援するところにデザインの価値があり、人と物をつなぐところにデザインの存在があると考えています。

例えば、有名な建築家や作家、画家などの作品は一目で誰の作品なのかが分かりますが、私の場合は、建築主に合わせたオーダーメイドの建築ですので、同じパターンはありません。以前、ある建築の先生から「東條さんの建築はポリシーがないね」と言われましたが、「ポリシーがないのが私のポリシーです」と答えました。

私の設計は、アンティークな建物やハイテクな建物などいろいろありますが、建築主の意向に添うだけではなく、地域性、機能性、耐候性などを考慮し、最良の提案をします。建築主の意見は尊重しますが、決して迎合するのではなく、お互いが納得のいく設計を心がけています。



「決して妥協せず、納得のいく仕事がしたい」と、打ち合わせにも熱が入る。

## 好きな言葉はありますか

たくさんあります。例えば「義理と人情」です。人間というのは、特に最近は得か損かで判断しますが、私は「受けた恩は石に刻み、与えた恩は水に流せ」を座右の銘にしています。

私が初めて給料をもらい、その年に帰省したとき、小さいころからお世話になった方々に、お袋と一緒に菓子折を持って、挨拶回りをしました。「受けた恩は石に刻み」ということですよね。そういう教育を両親から受けてきたので、建築主に対しても設計の依頼をいただいた恩を絶対に裏切ってはいけないという気持ちがあります。

また、日本人の美徳として、聖徳太子の「和を持って尊しとなす」という言葉があります。また、論語には「和して同ぜず」という言葉もあります。お互い協力はしながらも、表面的に繕うのではなく、それぞれの立場立場で言うべきはしっかりと言う。そういう関係で仕事ができれば、いい結果になると思いますよ。

## 東條さんが思う景観について

景観とは「人々のこころに安らぎを与えるもの」だと思います。主観によっていろいろと違うでしょうが、要は美意識。美しいまち並みを造ろうとしても、一朝一夕にはできません。それぞれ主観や価値観が違いますから、ある程度の規制が必要になります。例えば、ヨーロッパのまち並みなどはきれいですが、独裁的な政治によって造られたものなんです。

一方、京都の五重塔は、当時の建築文化にない奇抜な建物だったと思いますが、今では京都らしい風景になっていますよね。

目で見たものが景観になるのですが、まち並みの景観には、そこに息づく生活があります。その地域の風土であったり、文化、社会経済活動など、いろいろなものが絡み合って景観がつくられています。そこに自分だけがよければいいという考えの人間がいてはいけないのです。道徳とか倫理観を幼児のときから教えていくことが大切だと思います。

景観についても、幅広く子どもたちに教えていく必要がありますが、まずは自分の部屋や身近な所をきれいにすることが大切ですね。

それから、景観の美しいまちというのは、観光客も多いものです。景観が美しくなると、その背景にある文化が根付き、景観とマッチします。あとは、「ホスピタリティ」が必要ですね。心のこもったおもてなしがあふれるまちには観光客がどんどん訪れますし、交流人口が増えれば、その地域の経済も活性化して、みんなが良くなっていきます。それが、その地域の文化になるのです。

ヨーロッパでは景観に対する意識が高く、絵画のような景色が見られる。(2009年冬　チェコ視察)